第２回社会工学科ＯＢ＆ＯＧ懇話会　講演録

主催：社工会

日時：2018 年 2 月 28 日(水)　19:00～20:30

場所：東工大大岡山キャンパス西 9 号館 W933 講義室

テーマ：「地方再生って一体何だ？　～限界集落からの報告～」

講　師：渡邉 泰治（わたなべ やすはる）氏

渡邉と申します。見渡して、存じ上げている顔もあれば、初めてお会いする方もいらっしゃいます。今日はどうぞよろしくお願いします。ちょうど半年ほど前に、飲み会の席で池野さんに「話をしてくれないか」と頼まれて、酔っていたため OK してしまいました。正直今は後悔しています。今日の話には社会工学的な見地や学術的な見地は無いかもしれませんので、どうかユルく話を聞いていただきたいと思います。

タイトルは「地方再生って一体何だ？」ということで、私が今おります新潟県魚沼市横根地区でどんなことをしているのか報告したいと思います。今年は全国的に寒いと言われる中、新潟もかなり寒かったようです。「ようです」と言うのは、私自身、雪国の経験が無いものですから、あまりよく分からないのです。それでも集落には１m を超えるつららが出来て、集落の方も珍しいことだと言っていました。ただ雪国というと常に雪に覆われていて、どんよりしている様に思われがちですが、実際にはそんなことはなく、青空が広がる日も多いです。

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は 1960 年の 9 月生まれで、今年の 9 月で 58 歳になります。1985 年に社会工学科の原科研究室を卒業したのですが、私の代が原科研究室の第１期生でした。研究室では、現地に泊まり込んで調査するといった、工学部というよりは社会学的な研究をしていたような記憶があります。今思えば、その時の経験が今に活きているように感じる、今日この頃です。卒業後は電通に入社し、主にマーケティングのプランニング部門に属し、財務関係や監査といった堅い仕事も経験しました。その後、2015 年の 3 月に早期退職制度を利用して会社を辞めました。現在自宅は練馬区にありまして、そこに妻１人と大学１年生の子供を残し、自分自身は魚沼市に単身赴任をしている状況です。

会社を辞めてから今に至るまでの話をしますと、退職後は関心のあった社会保険労務士の試験勉強をしていました。年金や健康保険などの社会保障を全て会社任せにしていたた

め、何も知らないのはまずいということで、勉強していたのですが、試験には受かりませんでした。その後は、妻との約束であった主夫修行を行う中で、「大学を出てずっと大企業で働く男はなんてダメなんだ、主婦の仕事ってこんなに大変なんだ」ということを、骨の髄まで思い知らされました。この時から家事や自分の身の回りのことは徹底して自分でやるようになり、これが今の生活に本当に役立っています。その後、再就職活動もする中で、東京から離れても良いのではないかと思うようになりました。

ある日知り合いの方から、「有楽町駅前の交通会館に、ふるさと回帰支援センターという場所がある」と教えていただき、訳もよく分からない状態で行ってみました。その時に、たまたま魚沼市が地域おこし協力隊の募集説明会をやっており、「せっかく来たのだから話を聞いてみるか」と話を聞いていきました。しかしながら、実は協力隊の応募には年齢制限がありまして、50 歳以下ということだったため、あまり真剣には話を聞いてはいませんでした。すると説明会の後の質問タイムにて「渡邉さんはどういうことをされていたのですか」と聞かれたので、電通時代の話をしたところ、びっくりしたのですけど、真顔で「渡邉さん、魚沼に来てくれませんか」と言われました。初対面でこの言葉。よほど人が足りていないのかと驚きを感じつつ、その日は終わりました。

3 ヶ月後、再び魚沼市から「年齢制限を緩めたので、またふるさと回帰支援センターで行う説明会に来てくれ」と連絡をいただきました。この時は全然乗り気ではなかったのですが、かなり熱心にお誘いを受けたので、説明会に赴き、魚沼の方と再会いたしました。私は魚沼にも新潟にも縁もゆかりもありませんから「行ったことない所でいきなり暮らすのは難しい」と話すと、1 ヶ月限定のインターンシップの提案を受けました。どうも用意されていたようです。その内容は、魚沼市にある重要文化財の『佐藤家』の茅の葺き替えをやるので、その職人見習いとして 1 ヶ月滞在するというものでした。当時 55 歳でありましたから体力的に無謀と思いつつ、熱意に押されて形だけは応募しました。先方から断ってくれると思ったからです。結果は快諾でした。

只見線の入広瀬駅という場所に降り立った時、映画のセットかと思うほど静かな風景に

茅葺き職人見習い体験

- 協力隊応募を判断するための現地情報収集
- 期間：6月7日～7月7日の一か月間
- 午前8時から午後5時
- 平日3日現場、残り情報収集
- 地元の古民家に滞在
- 5つの初体験
  職人体験、古民家暮らし、完全自炊、
  テレビ＆新聞なし、facebook投稿

驚いたことを今でも鮮明に覚えています。そこからすぐ近くにある古民家に１ヶ月間滞在することになりました。その目的は、茅の葺き替え体験をするだけでなく、インターンシップの後もこの地区に３年間いて大丈夫か判断することと、この地域の抱える課題が自分にとって対応できるものなのか見極めることでした。６月から７月の１ヶ月間滞在する中で、週の半分は茅葺の作業を朝８時から夕方の５時まで行い、あとの半分は魚沼市中の集落をまわって話を聞いたり、市が策定している基本計画やパブリックコメントに目を通したりしました。もちろん古民家での１人暮らしは初めてで、身の回りのことは全て自分でやらなくてはなりません。ここで以前行っていた主夫修行が役に立ちました。テレビや新聞、ラジオもないという環境も初めて、『にいがたで暮らす・働くインターン』というフェイスブックに投稿するのも初めてという日々を送りました。

『佐藤家』は山の中腹にあり、鳥のさえずりと小川のせせらぎが BGM の、非常に心地よい現場でした。期間中は待機小屋で職人の方々とずっと時間を共にしていたのですが、職人の方は裏表がなく、会社の人間より付き合いやすいように感じたのは新しい発見でした。また、会話をする中で彼らの暮らしの様子を知ることが出来たのも貴重な経験でした。田舎はいまだに茅葺の家が多いと思われがちですが、文化財の指定などを受け資金を確保出来ない限り維持は難しく、その数は少ないです。ちょっとした大きさの家だと葺き替えに数千万円かかるので、普通の民家がやろうとしてもなかなか出来ません。

この茅の葺き替え体験は自分にとって非常に鮮烈なものでした。汗だくになって仕事が終わり、帰りの車窓から棚田や夕日を見て、これまでこれほど清々しい気持ちで職場を出たことはなかったですし、このような働き方があったのかと衝撃を覚えたのです。自分の奥深くで OS の書き換えのような変化があり、そして、地域おこし協力隊に応募しようと決断しました。

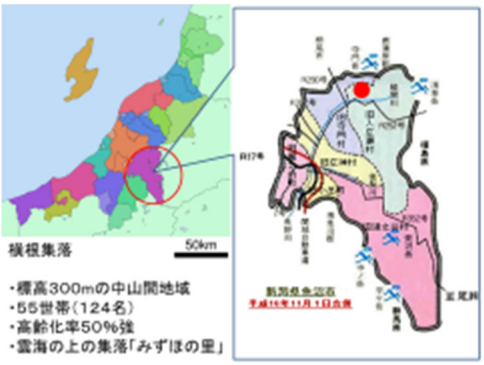
こうして私は横根地区の 2 代目の協力隊となりました。初代の方は私を協力隊に誘った女性で、はじめはかなり苦労されたそうです。地域おこし協力隊は現在総務省が管轄しており、任期は最長で 3 年となっています。しかし 1 年ごとに審査があり、自分は続けたいと思っていても、地域の方から「いらない」と言われたら、それまでです。魚沼市の場合は、市の非常勤特別職といって、市の議員さんと似たような立場になります。(現在は委託業務へ変更) ですので、基本的には市役所の指揮・命令系統には入っていませんが、市と共同しなければ始まらないことも多く、行政とは密接につながっています。

地域おこし協力隊員となる

- 横根地区の2代目隊員（10月1日着任）
- 任期は一年更新、最長3年
- 市の非常勤特別職
- 活動報酬は16万6千円/月
- 住宅、活動車両、ガソリン代、通信費は市負担
- 社会保険料、光熱費は自己負担
- 購入したのは石油ストーブ、ファンヒーター、TV。あとは譲り受けたり、借りる

ただ、基本的には集落の要望に沿った活動が中心になります。魚沼市の場合はこうですが、他の自治体だと市の非常勤職員として採用している所や、中には NPO といった団体の職員として協力隊を採用している所もあると聞いています。私は特定の団体の一員として行くのは、労働環境的にかなりグレーだなと思っておりましたので、今の魚沼市のやり方は非常にありがたいと思っています。もちろん協力隊はボランティアではありませんので、月に 16 万 6000 円の報酬が出ます。これを高いと見るか安いと見るかですけど、会社勤めで稼いでいた時の何分の 1 かの金額ですので、会社の同期にこの金額を言うとかなり驚かれます。しかし、私が生活費で使っているのは 4 万円程度ですので、この金額で十分食べていけます。さらに住宅と車、ガソリン代、通信費は市が負担してくれるので、6 万円あったら十分なくらいです。移住して新たに買ったものは、石油ストーブとファンヒーターとテレビく

らいで、その他の家財道具は「使いなよ」と譲り受けたもので揃ってしまいましたので、お金を使うことはほとんどありませんでした。そもそも、東京のようにお金を使う所も少ないですし。



魚沼市は細長い新潟県の出っ張った位置にあります。かなり面積が広くて、この中に東京23 区を入れても相当余ります。ただしおよそ 70%が森林ですので、残りの 30%に 3 万 7000 人が住んでいるのですが、はっきりいってスカスカの状態です。隣の南魚沼市には新幹線が通っており、皆さんが知っている魚沼に関するものは大体南魚沼市にあります。新潟県まで 4,5 時間かかると思っている人も多いですけど、最寄りの浦佐駅まで東京駅から 90 分で到着します。浦佐駅から横根まで車で 40 分かかりますが、途中信号も少ないので非常に快適です。横根集落は標高 300m の中山間地域にあります。去年の段階で 55 世帯・124 人が暮らしており、高齢化率は 60%ほどです。非常に景色が良く、時折現れる雲海の上にある集落はヨーロッパのアルプスに似た風景だとも言われています。また、土壌が粘土質のため非常においしいお米が採れる地域でもあります。雪が多く降るので、丸い屋根をした車庫もこの地域の特徴です。現在私が住んでいる家は 7LDK あり、そこに 1 人で住んでいますが、暖房費がもったいないので、その中の 1 部屋しか使っていません。今年の積雪は 4m ありますが、除雪体制のレベルが非常に高いので、日常生活にほとんど支障はありません。

横根での暮らし①

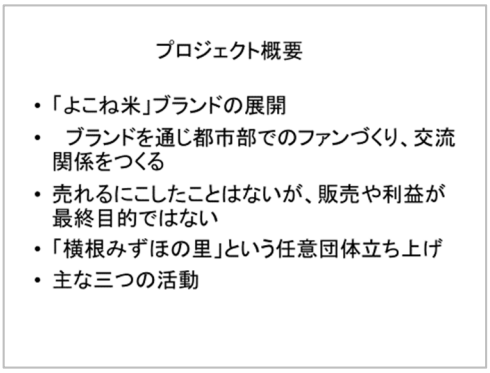
- 各戸への挨拶まわりからスタート（2,3戸/日）
- 新報記事、メディア報道で「ちょっと話題の人」
- １年間ほど誤解されていたようだ
- 茶の間
- 道普請（不参加は罰金あり）
- 賽の神

私が横根に行ったのは 2016 年の 10 月で、50 歳を超えて来る人は珍しいと、早々に新潟日報に取り上げられました。もちろんそれは集落にも配られますので、各家庭へ挨拶回りを行った時には、既に私のことを知っていて、話が弾みすぐ帰らせてもらえなかったのを覚えています。同時期、勤めていた電通の問題が連日テレビで流れていましたから、どうやらその件で東京にいられなくなった「ワケありの人」とも思われていたようです。

当然、集落のいろいろな行事にも参加します。その一つに草刈や冬支度の雪囲いなどを行う『道普請』というものがあります。これは住民全員が参加しないといけないもので、参加しないと罰金が取られます。他にも、無病息災を願う『賽の神』であったり、集落のばあちゃん達の交流会などがあります。横根のばあちゃんたちは非常にキュートで、観光協会のポスターにも起用されています。こうして集落の方々と少しずつ親交を深めていきました。米と雪が共通の話題なので、集まると一体感をすごく感じます。また、集落内の出来事の伝達スピードは SNS よりはるかに早いです。

横根での暮らし③

- 昭和30～40年代の近所づき合いのよう
- 渡邉、酒井、五十嵐、布澤
- 米と雪は共通体験
- SNSより早い情報伝達スピード
- 住まいは東京より数段立派、広い
- 専業農家は一握り
- 食卓も非常に豊か
- ていねいな暮らしぶり



着任してすぐに横根プロジェクトというものを始めました。横根という地名をブランド化して、皆様にとっての第二の故郷となることを目指しています。具体的には横根で採れる魚沼コシヒカリを『よこね米』として販売し、ファン作りと交流を生み出すことを行っています。ここでよく陥りやすいのが、販売による利益を最終目標にしてしまうことなのですが、私たちは交流関係を作ることにこだわっています。その活動を担う『横根みずほの里』という任意団体を立ち上げて活動を行っています。その事業は主に３つです。

小生は男衆の下から5番目。完全なる若手です。

１つ目は『こめのま』という「よこね米」を専門に取り扱う EC サイトの運営と販売です。初めは 30kg の袋詰めで販売を行っていたのですが、東京でそんな大量のお米を欲しがる人はいないので、今は小分けにして販売しております。ありがたいことに、去年収穫した分は既に完売となりました。

米直販サイト「こめのま」による販売

- 首都大学東京の学生との協働で2016年9月スタート
- 5㌔、10㌔、30㌔の袋詰めを販売
- 最終的に一定数の定期購入者の獲得を目標
- 横根と東京の間で定期的に販売進捗を共有する運営会議を実施
- 学生は活動成果を論文にまとめ、第28回「ヤンマー学生懸賞論文」の大賞を受賞。賞金（100万円）

新潟日報
平成２８年９月２９（木）
掲載

この活動には経緯がありまして、私が着任する 2 年前から首都大学東京の研究室が横根に出入りしておりました。そこの学生が横根のお米をもっと外に販売するためにベンチャーを立ち上げました。彼らは本当にこの手のスキームをよく勉強してますが、何せ実践経験がないものですから、当初は私も嫌われない程度にアドバイスするという形でスタートし、その後集落が販売主体となり今日に至っています。

第28回ヤンマー学生懸賞論文

住民主体による地域内発型アグリビジネス開発と地域活性化への影響～新潟県魚沼市横根地区における「こめのま」の事例～で大賞受賞

現在、販売は袋売りに限定しており、横根と東京で連絡を取り合いながら販売しております。学生達は本当に優秀な子が多く、この活動を論文にまとめてヤンマーが実施する学生懸賞論文に応募したところ、なんと大賞を受賞しました。その賞金は 100 万円といいますから、私も深く感心いたしました。それ以外にも、販売開始当初は、東京で毎週末開催される『青山ファーマーズマーケット』に出店し、東京の購入者はどんな人なのかということを知る取り組みも行いました。これには集落の役員のお父さんたちにも来ていただき、販売を実際に手伝ったりしてもらいました。

2.魚沼市ふるさと納税返礼品事業への参加

- 都市部に住む「主婦層」に狙いを定める
- 「扱いやすい」・「保存しやすい」・「あげたくなる」をポイントに開発
- 業者や企業の手によらない集落の商品
- ブランドの背景にある物語として重要
- 手間はかかるがこれは強み

２つ目の事業は「ふるさと納税返礼品」で、主婦層に狙いを定めた商品開発を行っています。お米のブランドは全国に多数ありますけど、業者や企業ではなく集落の人たちの手によるブランドなんだということを重要視して、そのストーリーを大事にしております。実際に集落のお母さん達がお米を小分けにして袋詰めします。一回で使い切れるというだけでなく、知人や友人に差し上げる方も多いようで、このサイズは主婦層に好評を得ていると感じています。

3.よこね米オーナー制度

- 骨子は「稲作体験つき新米予約販売」
- 一口＝で30㌔玄米（平成30年米募集！）
- 精米、複数回に分けるなどにも対応。
- 山菜料理教室なども実施。精米や袋詰めも新鮮な体験
- 「人に見せたくなる。あげたくなる」工夫

３ つ目の事業はオーナー制度で、これから特に力を入れていきたいと考えています。骨子は稲作体験付きでお米を予約販売するというもので、１口当たりの金額を定めて募集をかけます。１ 口購入いただくとその田んぼで取れた米３０kg（玄米）をお渡しするというものです。ちなみに宣伝になりますが、平成 30 年のオーナー募集を今後行いますので、皆様ぜひご検討頂けたらと思います。実際に来ていただいた方には新鮮な体験を用意しております。最終的には小分けにしてその方の名前や写真を入れたオリジナルラベルでお渡ししており、これも好評を得ています。今後は、同窓会のメンバー、草野球チーム、会社の仲間や同僚など、まとまった口数でオーナーになっていただける方々の募集に力を入れたいと考えています。

以上のような活動を行っているわけですが、この話を友人や会社の同期に話すと決まって「ああ、地方創生をね」と返ってきます。私は今日のテーマでもあります「地方創生」という言葉に大きな違和感を覚えています。言葉の響きのせいかもしれないですが、どこか上から目線を感じるのです。使い勝手の良い便利な言葉のため、本当のことが見えなくなっているように思います。この事にまつわる話をこれからしますが、結論はないのであらかじめご了承ください。

「地方創生」
なんとなく感じる上から目線
分かった気になれる便利な仕分け箱

まず東京で地方創生と言う時、地方ってどこを指しているのかと疑問に思ってしまいます。どうも地方というのは東京を離れた商業と工業を基盤とした地域とその周辺を指しているようようです。仮にこれを街場と呼んでおきます。東京から見ると横根はもちろん、長岡市も新潟市も“地方”という括りに入っています。しかし長岡も新潟市も、加えて魚沼市の街場も東京と本質的には同じ。というのが私の認識です。濃淡はあるものの経済を中心とした価値観が行き渡り、横根集落に見られるような人間関係はかなり希薄です。言い換えれば、地方と一口にいっても街場は東京の引力圏内なのです。引力圏内にある地域は、自分たちの「生きる＝食べる」を引力圏外に頼っており、これから廃れていくと言われている引力圏外が引力圏内を支えている関係にあると強く思います。ただ都市や街場の人たちはそのように全く思っていないのが現状です。東京の人は引力圏の外側は別世界だと思っているし、魚沼の街場の人でさえ横根集落は別世界だと思っていると感じます。引力圏内から圏外には一方通行的に膨大な情報が流れますが、外から内には本当に情報が入ってゆかない。そのために、いろいろ偏ったイメージや誤解が跋扈しているように思います。例えば、「定年後は田舎でのんびり暮らしたい」という声をよく耳にしますが、これは都会人が抱く典型的なファンタジーであり、現実ではありえません。何から何まで自分で

「地方創生って何？」①
- 「地方」＝都市、街場とその周辺
- これらは、本質的に東京の引力圏内
- 引力圏の外側は集落がまだ機能
- 圏内の「生きる」を支える（外の死は内の死）
- 外側のことは別世界、他人事

やらないといけないため、都会よりも生活をマメに送らなければなりません。

また、最近『半農半Ｘ』というライフスタイルも耳にしますが、これも都会のファンタジーです。実際に農業で食べていける人はほとんど存在しませんので「半Ｘプラスアルファ農業」が現実ですし、Ｘの選択肢も少ない。実際にＸとして可能性があるのは、市役所職員やJA職員、建築・土木関係の仕事であり、かなり職種が少ない上に給与も東京に比べて低いのが現状です。ただ、お金は東京の1.5倍近い価値がありますので、給与が低いことは大きな問題ではないかもしれません。

「地方創生って何？」②
- 「田舎でのんびり」は都会人のファンタジー
- 「半農半X」もファンタジー
- 現実は「半Xプラスα農業」
- ただし、Xの選択肢は少ない
- お金の価値は1．5倍

特に申し上げておきたいのは雪に関する報道についてです。メディアで取り上げられる雪の報道は現実とかなり異なります。例えば、テレビ局は大雪の映像とともに「大変だ、困った」と言う声を欲しがるのですが、雪に慣れた人達がそんなことをあえて言うことはありません。ほとんどの「毎度のことだからねぇ」というコメントはカット。空気を察して欲しがるコメントを言ってあげると採用。もちろん夜の間、車を外に駐車しておくことなどなく、普段あまり積雪のない地域で埋もれた車の映像をとり、編集でつなぐ。こうしてステレオタイプの出来上がりです。それを繰り返し流すのですから定着してしまいます。中には明日の朝まで雪かきをしないでくれと頼まれた方もおり、かなり作られたニュースだと思ってください。どうも、３０～４０年前のイメージのまま更新されていないように感じます。実際には、除雪体制が完璧なまでに整備されているので大雪の日でも車は普通に出せますし、日常生活にほとんど支障はないということを皆さまに申し上げておきたいと思います。

「地方創生って何？」③
- 実態と大きく異なる豪雪地帯の報道
- 「困った」「嫌だ」を必死にかき集めにくる
- つなげて編集＝ステレオタイプ完成
- 繰り返し流す＝定着
- 地元はうんざり、あきれている。笑うしかない

話を戻します。街場にいる人は自分たちは大丈夫だと思っている傾向にあります。これは東京だけでなく魚沼市にもいえる話です。しかし私は都市や街場の将来こそ危ないと思っています。それは、商業や工業が主体の街場では現役を退いた後やることがないからです。東京はお金さえあれば時間を潰せる娯楽がありますから、この問題は東

「地方創生って何？」④
- 街場の人たちも「自分達はまだ大丈夫」
- 街場の将来こそ危ない。チャンスが見えない
- 引力圏外にある地域・集落にチャンスあり
- しかし戦略、計画にまで昇華できない

京より深刻かもしれません。また、地方の街場はどこも同じように見え、特徴や魅力をどこに見出して良いのか分からないというのが私の率直な感想です。逆に私のいるような集落は都市や街場の対極にあるため、価値や訴求ポイントを見い出しやすく、それだけチャンスもあるのではないかと思います。

しかしチャンスはあってもそれを戦略・計画に昇華できないという次の問題があるように思います。その原因は行政や経済の中心が街場にあることに尽きます。また、行政は公平性を重視しますから、やりたいことがあっても１つのことに資源を集中することが出来にくいことも原因です。窓口業務が中心のため、「仕掛けていこう」という組織体制になっていないこともそうですし、地方では公務員が最強の職業ですから生活は安泰であり、出る杭が打たれることを非常に恐れる体質が相まって悪循環を起こしている様に見受けられます。

「地方創生って何？」⑤

- 行政・経済的な重心が街場にある
- 公平性の原則＝絞り込みと集中ができない
- 手続き的な仕事の組み立てと縦割り体制
- 出る杭は打たれるを恐れる。でも生活は安泰

これは他の地域でもよく見受けられますが、誰を狙っていくのかというターゲットの想定が全く無いままプランニングしている事が多いように感じます。本来ならば、都会の人の不満だとか夢だとかを知って、そこに魚沼が持つ資源で提供できる価値を見いだす。これが自然なステップなのですが、漠然と「何が良いのだろう？」と自分たちが良いと思うものを中心に据えがちなので、太く鋭い価値をなかなか見いだせない状況に陥っているように感じます。一言でいうと都会の暮らす人の気持ちを分かってなさすぎるということです。しかし東京の人もこちらの暮らしも気持ちを分かっていないので、お互い様なのかもしれません。

「地方創生って何？」⑥

- 「いいところ」をよそ者から集め無翻訳で発信
- ターゲットの想定がない＝価値を発見できず
- 都会人の心理を知らなさすぎる
- 「コミュニケーション＝義務的周知」気質

「地方創生って何？」⑦

- 移住・定住と自治体は掲げるけれど・・・
- 観光産業（事業者）の利益≠地域全体の利益
- 企業・工場誘致も本当に地域全体の利益になるのか（無人化、AI導入）

もう１つは、魚沼市に限らず自治体はいきなり移住・定住を目標に置いて人を獲得しようとする傾向が強く、東京の人がいきなり生活を移す事のハードルの高さを分かっていないように感じることです。移住に関するセミナーや説明会を開くと、結構男性は前のめりになる人が多いのですが、大抵は奥さんに首根っこをつかまれ引き戻されることが多いのです。ですから、最終的には移住・定住をめざすにせよ、まずは東京にいる人と関係を作り、二地域間居住といった、行ったり来たり出来る人を獲得するのが現実味ある目標ではないかと私は感じています。また、必ずといってもいいほど活性化の施策として観光がお題目に入りますが、観光が成り立つ地域とそうでない地域で大きな差があるように思います。多くの場合、観光資源は点在しているので地域、集落全体で観光に関わっている場所は少ないという現実があります。ある特定の施設や業者が潤うだけでは、地域・集落全体の利益に結びつかないのです。その他にも、企業誘致や工場誘致といった話がありますが、昨今の工場は無人化が進んでおり、地域の活性化の目玉にはならないように思います。

「地方創生って何？」⑧

- 地域（集落）単位から立ち上げる必要性
- 「地域おこし＝若者」という図式は本当か？
- 必要とされる人材と3つのターゲット
- 1000～500分の1の確率

私は、東京の引力圏内で通用している原理を単にはめ込むのではなく、引力圏外にある集落という単位からものごとを立ち上げる必要があると思っています。ただ、これをやるには多くのスキルや経験が要求されます。そのため、地域おこし協力隊というと若者を募集しがちですが、異文化への適合やコミュニケーション、行政との交渉といったスキルのある社会人経験者がもっと必要だと思っています。私は 50 歳以上 60 歳未満の早期退職者を狙ってはどうかと提言していますし、実際、近くの集落では大手製薬会社を早期退職した方が来て活躍しています。でも若い人が来てくれるとやっぱり嬉しいですけど。

私は横根集落の今後を考えますと、ターゲットを３つに絞っています。1 つ目は今述べた早期退職者で、2 つ目は 30 代くらいの女性です。女性の方が覚悟があって肝の据わっている人が多いからです。3 つ目は学生さんです。社会的な課題に関心がありプランニングの訓練を受けてきた学生。こういう課題に取り組みながら本業とのシナジーを模索できる企業に就職する若者です。最近は副業に寛容な企業も増えてきているので、そういった方々と関係を持てると良いなと考えています。とは言うものの、実際に手を上げてくれる方は 1000

人に 1 人か 2 人くらいでしょう。それでも東京にはとにかく人がいますので、10〜15 人くらいの人を見つけるのはそこまで難しい話ではないと考えています。

今日は 60 歳を間近にした方も多いと思いますが、是非一度、東京の引力圏を出てみませんか。必ずいろいろな気づきがありますし、自分がこれまで何をしてきたか、これから何をするべきなのかを発見できると思います。その第一歩を私のおります横根集落から踏み出されることを切に願っております。ご静聴ありがとうございました。

最後に

一度、東京の引力圏から出てみませんか？
自身の「今」と「今後」をきっと発見できるはず

横根集落は
皆さんとの「出会い」を待っています！